おれの夢は

pb
135

おれの夢は

ポケット文春 135

1964年6月20日　初版発行

定価　200円

著者　南條範夫（なんじょう　のりお）©

発行者　上林吾郎

発行所　文藝春秋新社
東京都中央区銀座西8ノ4

印刷　凸版印刷
製本　加藤製本

落丁乱丁がありました場合はお取りかえします

おれの夢は

推理長篇

南條範夫

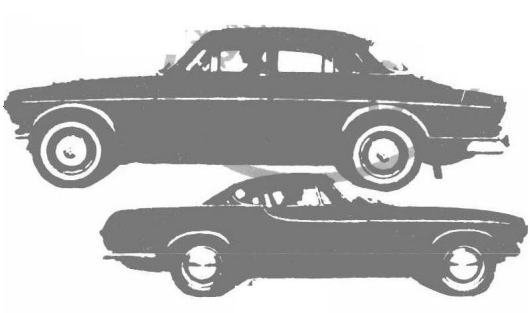
文藝春秋新社

第1章　四人の男　5
第2章　第一の犯行　35
第3章　第二の犯行　65
第4章　終わりが始め　95
第5章　破綻　125
第6章　おれの夢は　157

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

装幀・カット　　金森 馨

第1章　四人の男



1

六階建ての豪壮なJ――マンションは、その外装を九分通り終えて、内部の仕上げにかかっていた。

現場で働いている人間の数も、一時よりはずっと減り、喧しいクレーンの音や、トラックの響きや、怒号する声も聞こえなくなっていた。

分譲式アパートは、最近の流行である。それも次第に豪華なものになっていった。いったい誰がそんな金を出して買うのだろうかと思われるような高価なものが、案外よく売れてゆく。

このJ――マンションは前代議士の飯山省蔵が、政界を諦めて、老後のために、B――建設の社長染井重之輔と提携して企画したものだった。

現場の片隅に、工事小屋がある。

三棟並んでいた。

その一番外れの小屋は、半ばが種々雑多な資材の置場になっており、半ばが、今も残っている現場員の寝泊まりするところになっている。

四人の男が、そこに車座になって、酒を飲んでいた。

四人ともそこに寝泊まりしていたわけではない。常住者は二人だけだった。

その一人は、現場で係長をしている男で、下山という。三十六、七歳だろう。頑丈なからだつきで、顎の張った四角い顔に、どこか人を食ったふてぶてしいものを漂わせている。

もう一人は、熔接工で熊谷という二十一、二の青年である。男振りはいい。ちゃんとした洋服でも着せて歩かせれば、すれ違った時、振り向いてみるBGも少なくないだろう。魅力のある眼をしている。もっともそれは、無邪気な清純さを示すものではなく、相当悪いことをしても、不思議にそいつの痕跡を残さないと

いった種類の、恵まれたチンピラ悪党の魅力的な眼だ。
この部屋にとっては臨時の闖入者である他の二人は、岩尾と小西という男だった。
小西はもう、四十を一つ二つ越している。眉のせまった、額の狭い、卑俗な顔立ちの小男で、B——建設の運転手をしていた。
岩尾は、年齢不詳だが、三十から四十までの間に違いない。他の三人と違って筋肉ではなく、頭脳によって生計を立てていることは、一見してわかった。といっても、大した頭脳を要する仕事ではない。現場関係の事務を扱っているだけだ。
余り整った顔立ちではないのだが、まるで能面のように表情を動かさないので、人によっては傲慢な奴だとも思うだろうし、また、薄気味悪い奴だとも思うだろう。
四人が集まったのは、格別そうしなければならない用件があったわけでもなく、申し合わせたわけでもない。
いつも顔を合わせているうちに、何となく他の連中よりも気が合うのか、話をする機会が多かった。
下山が、岩尾を誘って、一杯やってゆかないかといい、ちょうどその時そこに来合わせた小西が、便乗したのである。
ビールの空瓶が十本位、転がっていた。
初めの三、四本は下山が奢ったのだが、あとは、岩尾が追加したのだ。
近くの酒屋にそれを取りに行ったのは、勿論、一番若い熊谷だった。
今日一日の出来事が話題に上っていた。
出来事といってもいつもと大して違うところはなかったが、ただ、夕刻、仕事の終わる少し前に、B——建設の染井社長がやってきた。
七十一歳だという。
裸一貫から叩き上げた男。禿げ上がった額が、まだつやつやして、トマトのように紅かった。
一語ごとに、唾を吐きちらすような激しい口調で物をいう。
だいぶ、文句をつけていった。
それは、いつもの事だから、皆、大して気にしていない。
四人がいまいましそうに口に上せたのは、染井の車に乗っていた若い女のことだ。

それが何者だかわからないが、染井の情婦であることは間違いない。
染井が見回っている間、和服の裾をちらつかせて、くっついて歩いていた。
ひどく色っぽい女だ。
染井は、お京と呼んでいた。
——畜生、老いぼれ社長、うまいことをやってやがる。
働いていた者は、皆、そう思ったに違いない。あの齢で、妾三人囲っているという噂は前から皆が知っていた。お京と呼ばれた女が、その妾の一人であるか、臨時のものであるかはわからなかったが、いずれにしても皆の羨望の囁きの中に、ちょっぴり憎悪のこもっていたことは、事実である。

2

「えいくそッ、金が欲しいなあ」
熊谷が、コップのビールを、ぐっと一のみにして、乱暴に下に置くと、睫の長い眼をきらきらさせて、叫んだ。
「金があったら、どうするんだ」
下山が、にやにやした。
「どうするって決まってらあ、美い女と思う存分愉しむさ」
「お前の齢で、金がなきゃ女ができねえってのは、情けない奴だな。おれがお前の齢で、お前ほど色男なら、金なんぞなくったって、女に不自由はしないな」
「へへ、それがね、このごろの若い娘はなかなかちゃっかりしていてね。面だけじゃだめらしいね」
小西が、くぼんだ眼を細くしていった。
「下山さん、金が欲しくないのかい」
熊谷が、食ってかかった。
「欲しいさ」
「それみろ、誰だって欲しいや、金は」
「当たり前だ、ただ、おれの欲しいのは、小便くさい娘を手に入れるのに必要な、端た金じゃない」
「ふーん、じゃ、何のために金が欲しいんだい、下山さん」
「何のためって事はない。ただ、金が欲しいんだ」
「ごまかしちゃいけない。何に使うっていう目的もなしに金が欲しいっていうのはわからないじゃないか」
「わからない事はないさ。金ってものは、それだけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

で、目的になるんだ。何に使うかなんてことは、金を手に入れりゃ、自然にわかってくるさ」
「じゃ、どの位欲しい」
「多いほどいい」
下山が、当たり前のことを答えたので、熊谷は出鼻を挫かれて苦笑したが、
「おれは十万円欲しいな」
——あいつの欲しがっているスーツを買って、どこかへ連れ出すのに、それだけあれば、足りるだろう。
このチンピラ色男の夢は、さし当たり、そんな程度だったのだ。
「ばかやろう、十万や二十万の端た金が何になる」
「じゃ、百万」
「ふん」
「下山さん、もっと欲しいのかい、大きなことをいって」
「千万以下じゃ、問題にならないな」
小西が、口の端の泡をぬぐった。
「おれは、そんな夢みたいな事は考えないね、百万もあれば、有難いね——いや、二百万かな——三百万あればおんの字だな」

女房と二人の子供を抱えて、間借りをしている。家主との絶え間のない紛争で、女房はヒステリーになっていた。
そこから脱け出して、一間でも二間でもいい、自分の家を持ちたかった。そして、できれば、娘の欲しがっている衣裳でも揃えてやり、自分は毎晩、女房に文句をいわれないで、一杯やりたかった。
J——マンションの、豪奢な部屋を見ても、こんなところに住みたいと思った事はない。それは到底自分の夢の中にさえ入って来ない違う世界の存在だと思っている。
「岩尾さん、どうなんです。あんただって金は欲しいだろう」
熊谷が、黙って三人のやりとりを聞きながら、コップを重ねている岩尾にいった。
「欲しい」
相変わらず、眉毛も動かさないで答えたが、急にその眼を下山の方に向けた。
「下山君、君は千万円以上、欲しいといったな」
「欲しいね」
「前から、そう思っていたのか」

「うむ」
「その千万円を獲得するために、努力してみたのか」
下山は、赤くなった四角い顔を、大きな手でつるりと撫でた。何か改まったことをいおうとする時、いつもやる癖だ。
「やってみたね」
「どんなことを」
下山は、すぐには答えないで、手にしていたコップにビールをなみなみとついだ。
溢れそうになったやつを一口すすって、三人の顔を、次々に眺めた。
それから、コップを半分空けて、冷笑に近い笑いを洩らした。仲間を笑っているのか、自分自身を笑っているのか見当のつかない奇妙な笑いだった。
「おれは、岩尾さん」
ちょっと言葉を切ってから、いった。
「三度、刑務所にはいっているんだぜ」

3

熊谷が、えっと叫んで、眼を巨きくした。愕きよりも、敬意に似たものが、その瞳の中に拡がっていた。
小西は、嬉しそうに眼を細めた。
「へへ、おれも、実は、一度、刑務所にはいった。なあに、つまらねえことにひっかかってね」
「小西さんもかい、何をやったんだい」
熊谷は、話のたぐり出しやすそうな小西の方に、水を向けた。
「なあに、掻っ払いさ、もう十年も前のことだ、女房を貰ったばかりのころ、どうにもこうにも食えなくなっちまってね」
——何だ、掻っ払いか。
熊谷は、すぐに小西についての興味を失ってしまったらしい。
「下山さんは、何をやったのさ」
「ふん」
下山は、熊谷の質問を鼻先であしらった。
「子供の聞くことじゃない。ま、人殺し以外の悪い事は、大抵やったと思え」
少し誇張して答えた時、岩尾が、独り言のように呟いた。
「三度か——ばかな事をしたものだな」
「まったく——ばかなことをした」

「それで、もう、諦めたのか、千万円作ることは」
「どうだかな」
「また、やるのかい、何か」
熊谷が、好奇心を押えかねて口を出したが、下山は、岩尾だけを話の対手に選んでしまったらしい。
「機会があれば、岩尾さん、おれは、もう一度やってみる。そして、少しまとまったものを摑んだら、それで、すっぱりやめるつもりだ」
「また、刑務所へ行くのがおちだぜ」
「ふん、しくじったらな」
「おれなら、へまはやらない」
「誰でも、そう思うものだよ、ところがそうはいかないのだ」
「そうでもない」
「おれのやり方が拙かったっていうのか」
「君が、どんなことを、どんな風にやったか知らないから、何ともいえないな。しかし、これだけはいえる。君は、金を千万円——か、あるいはそれ以上——拵えようとして、何か計画を樹てて、失敗して、刑務所に行った。金が欲しい——という気が先に立って計画したから、失敗したのだ」
「金が欲しくなけりゃ、誰も、危ない橋は渡りゃしない」
「そうだ。しかしね、おれが何かやるとしたら——むろん、犯罪をだな、やるとしたら絶対に警察につかまらないようにやるということ自体に、全力を注いでやる。金はその結果としてはいってくるのだ。そういうつもりでやれば、必ず成功する」
「同じことだな」
「違う。金が欲しいということが先に立つと、計画が九分通り出来たところで、もう大丈夫だと安心してしまう。金が手に入ったような気になってしまうのだ。そこで、あとの一分に、手ぬかりができるのだ。警察はそこをひっつかむのだ。犯罪計画そのものを完全にすることに全力を注いで、金のことを忘れてしまえば、計画は百パーセント完璧なものができるから、失敗しない」
「岩尾さん、それは、あんたの頭の中で考えただけのことかね。それとも実際にやってみたことかね」
「まだ、実験はしてみないね」
「なあんだ、それじゃ、問題にならんな」
「おれには確信がある」

「そうかな、もっとも、あんたがやるとすれば、おれとは違って、何ていうのか、知能犯というのかな、頭をつかってやる事だから、あるいはうまくゆくかも知れんな。おれのやることは、荒仕事だ、そうはゆかない」

「知能犯というやつは、だめだ。知能犯をやる奴は皆、度胸がない。それに時間をかけ過ぎる。だから、うまくやったつもりでもボロが出る。てっとり早く、しかも完全犯罪の可能性の多いのは、実力を行使することだな。会社の経理をごまかした奴は、おそかれ早かれ、結局、尻尾を押えられるが、殺人や銀行破りは、つかまらない奴の方が多いのだ」

「ふーむ、そういえば、そうだな」

二人の対話から疎外されていた熊谷が中に入りこもうとして、やや頓狂な声を出した。

「岩尾さん、まさか銀行強盗をやろうっていうんじゃないだろうな、あっはっは」

岩尾は、ちらっと熊谷の方に視線を流したが、何もいわないで、ビールに手を出した。

「金が欲しいな」

熊谷が、また、いった。

「まったく、金が欲しい」

小西が、しみじみとした声で応じた。

「金が手に入るんなら、銀行強盗でも何でもやる」

熊谷が、調子に乗った。

「変な話になっちまったな」

下山が苦笑した。

「しかし、金が欲しいということだけは、間違いない」

「千万円以上――な」

岩尾が、無気味な瞳を据えて下山をじっと見詰めた。

「うむ」

下山が半ば冗談のようにうなずいた時、岩尾が思いがけない事をいい出した。

「どうだ、やってみないか、一人、確実に千万円以上になる仕事がある」

他の三人が一斉に眼を上げた。

岩尾が冗談ではなく、真剣にいったのだと悟ると、急に、重苦しい、胸の悪くなるような緊張が、一座の中に漲った。

それがすべての始まりだったのだ。

4

犯罪者が、普通の人間とまったく違った種類の人間であるわけではない。

彼らのある者は、境遇さえ許せば、一生警察や刑務所などとは何の関係もなしに過ごし、テレビや映画に出てくる犯罪者を、よその世界の人間ででもあるかのように冷笑しながら、穏やかな日常を楽しんだかも知れないのだ。

たまたま、やむにやまれぬ事情で、あるいは、ふっとしたはずみで、罪を犯してしまうと、崖を転がりおちる小石のように、罪の泥沼に向かって転落してゆく。

良心という草の根にひっかかって、ふっと青空を仰いで、怖ろしくなることもあるが、上から崩れてくる土砂のために、そいつは再び転落してゆくのだ。

だが、犯罪者の中には、ほとんど先天的ともいうべきものがないではない。

彼は、どんな境遇におかれたとしても、その境遇にふさわしい犯罪者になる。何かが、彼の魂の中にあって、この世の秩序に反抗させるのに違いない。

小学校では隣の席の児童の鉛筆を盗み、中学では下級生を脅喝し、社会に出れば、詐欺、横領、強窃盗をやり、ときには傷害殺人を行ない、死んでからでも、地獄の入口で偽名罪を犯すだろう。

下山繁が、三十七年間この世に生きていながら、その中の十二年間を刑務所の中で暮らしたのは、彼がこうした種類の、いわば、生まれついての犯罪者のタイプだったからである。

彼にとっては、世間で犯罪と呼ばれる行為も、他の行為と、大して違うものとは思われなかった。

少年のころ、彼は、他人に物を与えるのが、何故、慈善として称讃され、他人の物を奪うのが、何故、盗みとして処罰されるのか、十分に理解し得なかった。

どちらも同じ人間の行為であり、ただ彼は、後の方を、より好んだに過ぎないのではないか。

世の中へ出てからも同じことだった。

眼の前に、間の抜けた奴の眼をかすめさえすれば自分のものになる金があるのに、そいつを手に入れると詐欺だという。

邪魔になる奴を、ちょっと押しのけると暴行傷害罪だという。

下山は、憤慨した。

しかし、三度も刑務所に入れられ、十二年間も臭い飯を食わされると、さすがに、考えざるを得ない。

甚だ不当なことだが、この世には法律と警察という厄介なものがあって、彼の当然の権利の行使を邪魔し、彼が最もうまくやってのけたと思う仕事を犯罪と名付け、彼を刑務所に送り込んでしまうのだという事実は、いやでも認めざるを得なくなった。

といって、彼の犯罪本能が、消滅してしまったわけではない。

ただ、そのいまいましい法律や警察の手にひっかからないように行動しなければならないということが、犯罪本能に次ぐ第二の本能のようなものになって、彼の頭に沈澱してきていた。

彼は、より狡猾に、より注意深くなった。

行為の前に、考えることを学んだ。

しかし、そいつは、いつまでたっても、彼にとって苦手だった。考えたり、計画を樹てたり、脱け途をつくったりしておくことは。

生まれながらの犯罪者の中には、二つの種類があるのだ。動物的な奴と、植物的な奴と。

下山は、いわば動物的であった。

犯罪行為を思いつくと、大抵は、即座にやってのけた。

だから、しばしば、そいつが容易に露見した。

植物的な奴なら、もっと深く考え、綿密にプランを樹て、アリバイを十分に拵えておいて、やってのけただろう。

そういう種類の犯罪者を、彼は何人も知っていた。

そして、そいつらが、多少、羨ましかった。

——今度は、おれも、うまくやってみせるぞ、尻尾を摑まれないように、畜生。

彼は、そう考えていた。

勿論、今でも、完全に安全と思われる範囲内では、やるだけの事をやっていた。資材のゴマ化し、賃銀のピンはね——だが、こんなことは、犯罪の中にはいらない。彼のようなポストにあれば、誰でもやっていることだ。

何か大きなことが、やってみたかった。

「千万円以下の端た金は問題にならない」

と、彼がうそぶいたのは、本音である。

そのくらいの金を手に入れる仕事をやってみたかっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb